

日本語版によせて——原著者からの言葉

私がこの本を書き上げて以来、一九五三年のフランシス・クリックとジェームズ・ワトソンによるDNA構造の発見が、二十世紀の最も重要な生命科学の成果であることがますます明らかになってきました。十九世紀のチャールズ・ダーウィンの進化論以降、それは紛れもなく、人類の自己知識における最大の洞察です。ダーウィンの革命的なアイデアの意味が人間の知識に浸透するのに何十年もかかったように、DNAの意味が理解されるのにも何年もかかりました。もちろん、DNAの発見を端緒とした革命は、まだほとんど始まっていないと言う人もいるでしょうが、これらの理由だけを考えても、科学者であるかどうかにかかわらず、少なくとも、DNAの発見が何を意味しているのかについて少しでも理解してみようとすることは、私たち皆にとって絶対に必要なことです。この考えは、東京理科大学の田村浩二教授が「最近のDNA科学の進歩は私たちの想像をはるかに超えている」と書いてくれたことによって、私には、よりはっきりとしたものになりました。突然、私は田村教授から私の本を読んだことを知らせる電子メールを受け

取りました。彼は、それを日本語に翻訳するという大変な苦勞もされました。私は思いがけない翻訳者に、心から感謝の意を表します。クリックが働いていたカリフォルニアのソーク研究所のそばにあるスクリプス研究所で田村教授が研究を行っていたことを知り、その気持ちはますます強くなりました。田村教授は、クリックの話を直接聞き、そして、会うことさえできたのです。田村教授は、親切にも、これまで聞いたことがなかったクリックについての素敵な逸話を私と共有させてくれました。たとえば、クリックのオフィスの銘板には「ソーク研究所、フランシス・クリック」と日本語で書かれていたことや、クリックの車には特別な「ATGC」というナンバープレートがつけられていたことなどです。これが何を意味するのか、よくわかりませんか？ それなら、田村教授が翻訳した私の作品を読んでください……

ポール・ストラザーン

訳者まえがき

今後、急速に動いていく世界の中で、専門家であろうがなかろうが、「クリック・ワトソン・DNA」について理解していることは、人間の在り方を正しい方向に導いていくためのとても重要な教養になると思います。私は、一九九九年にアメリカのスクリプス研究所に留学し、すぐ隣のソーク研究所にいるフランシス・クリックにお目にかかる機会にも恵まれました。二〇一五年には、マット・リドレー (Matt Ridley) によるクリックの評伝 “Francis Crick: Discoverer of the Genetic Code” を翻訳する機会をいただき、『フランシス・クリック：遺伝暗号を発見した男』(勁草書房、2015年) の出版に至りました。この本には、マット・リドレーによる鋭い筆致でクリックの人生が描かれています。あらゆる層の読者向けの本ではなかったかもしれませんが。

「クリック・ワトソン・DNA」を巡る話は、この『フランシス・クリック：遺伝暗号を発見した男』をはじめ、既に、ジェームズ・ワトソン自身による『二重らせん』(江上不二夫・中村桂子訳、講談社、1986年) や『二重螺旋 完全版』(青木薫訳、新潮社、2015年) など、

数多くの書籍に書かれていますが、ポール・ストラザーン (Paul Strathern) による本書 “*Crick, Watson & DNA*” (Arrow Books, 1997) は、DNAの重要な発見について、大事な点を損なうことなく、しかも、必ずしも科学を専門としない人にもわかるように書かれている、大変良い本です。もともとは一九九七年に刊行されたものなので、古いには違いありませんが、この時代だからこそ、この普遍的な科学史について、客観的、かつ、平易に書かれた本書の意義があるのではないかと考えています。この翻訳本においては、クリックとワトソンの足取りと人間関係を追えるように、新たに巻末に地図と人物相関図を添えました。クリックとワトソンがDNA構造の解明に取り組んでいた当時の研究者のつながりを理解し、二人の足跡をたどることで、DNAの二重らせん構造発見のストーリーが、生きている人間の営みであったことを、より強く認識できるのではないかと思います。

田村 浩二

目次

日本語版によせて——原著者からの言葉 iii

訳者まえがき v

1 序文

2 DNAへの道…遺伝学の歴史

3 クリックとワトソン

4 あとがき

補遺Ⅰ 遺伝学…いくつかの事実、空想、失敗

補遺Ⅱ 科学史の年表

I

3

29

77

81

89

目次

補遺Ⅲ	本書で言及されている主な都市	96
補遺Ⅳ	本書に登場する研究者の関係	97
さらなる読書のために		98
訳者あとがき		100
訳者あとがき	補遺	103
索引		1